

第2節 小迫北・南地区、南台地区台地南部の調査について

小迫北・南地区、南台地区台地南部からは、前期前葉～晩期後葉の遺構・遺物包含層が確認された。以下に、大きな変化が認められる後期前葉以前と後期中葉以後に分けて、調査成果を整理しておく。

1. 前期～後期前葉

(1) 竪穴住居

小迫北地区台地部で縄文時代所産と推定される竪穴住居（SI01）、小迫南地区台地東部で大木10式期の竪穴住居（SI03）の2軒が確認されている（図171）。SI01は住居構築時の粗掘りであり、詳細は不明である。SI03は複式炉を持つ大木10式期の竪穴住居である。このことにより大木10式期には、小迫南地区台地東部で、南台地区と谷を挟んで同時期の居住地が形成されていたことが確認された。

(2) 土坑Ⅱ類（貯蔵穴）

南台地区台地南部及び小迫北・南地区台地で、合計28基確認されている。重複せずに検出されており、広範囲にわたる分布状況が認められる（図171）。南台地区台地南部・小迫北地区台地の西側では主体的な遺構となっている。半裁するなどの調査を行った土坑Ⅱ類の推定時期は次の通りである。

大木6式 SK23

大木7b式 SK155

大木9～10式 SK46・152

大木10式 SK153

これら小迫北・南地区台地部等で確認された貯蔵穴は、南台台地中央部から続く一連の貯蔵穴群であり、南台地区台地北部及び小迫南地区台地部の中期以前の居住地に伴うものと推定される。

(3) 遺物包含層

小迫南地区斜面部（81T）では、前期前葉の遺物包含層が確認されている。大形破片が少なく、還元率も悪いことから台地部からの流れ込みと推定している。小迫地区南谷部（75T）では、後期前葉の可能性が高い遺物包含層が確認されている。出土土器も小破片が多く、摩滅も激しいことから、谷上部からの流れ込みと推定している。これらの遺物包含層が検出されたことから、縄文時代に斜面部・南谷部を利用していた可能性が考えられる。

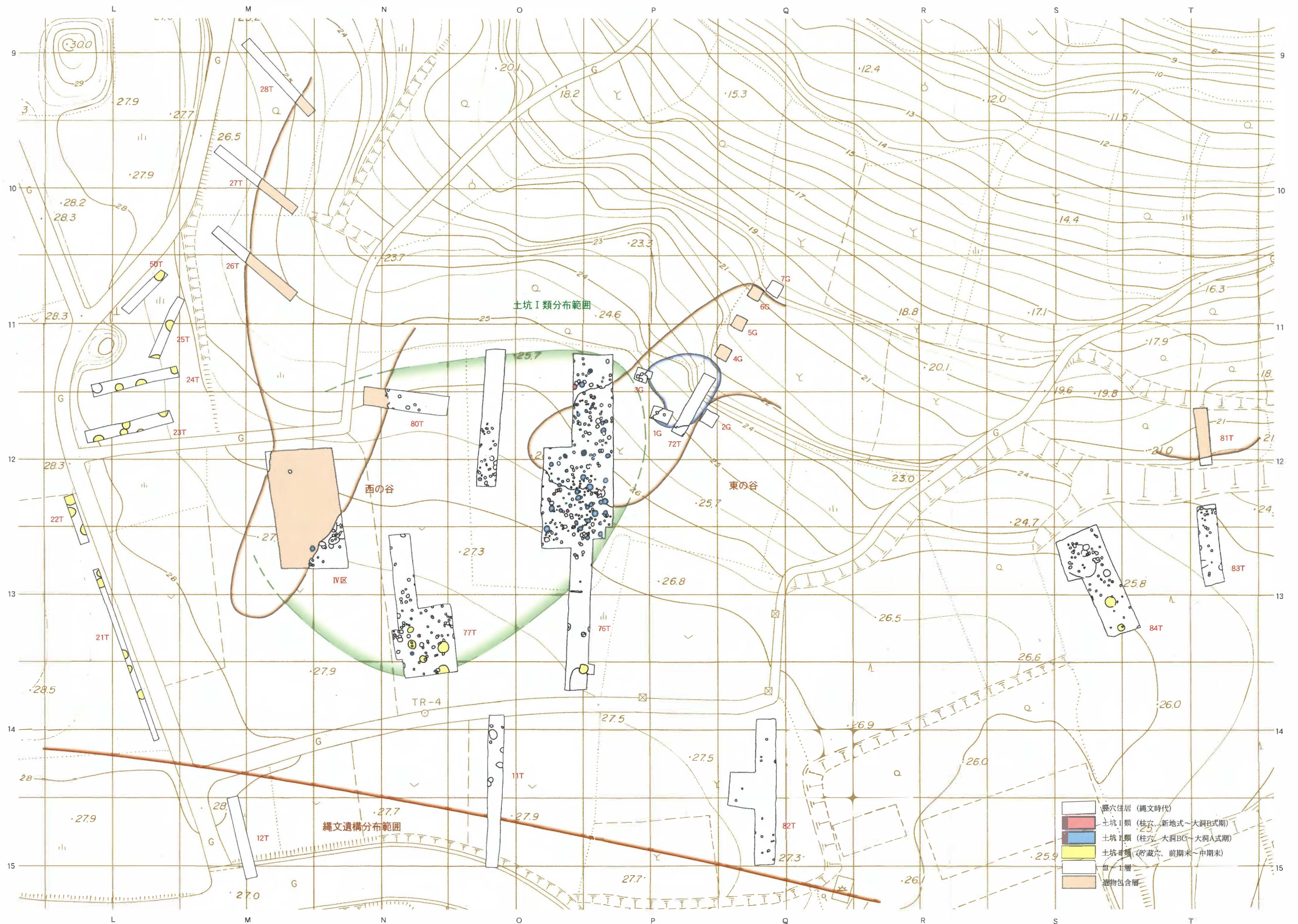
2. 後期中葉～晩期後葉

(1) 土坑Ⅰ類（柱穴）・土坑Ⅳ類・小土坑・掘立柱建物

土坑Ⅰ類は、小迫北地区台地部で196基確認されている。北から入り込む埋没谷（東の谷・西の谷）周辺に多く分布し、76Tの南側・77Tの北側で分布が希薄になっている。分布域は、約50×45mを測る。

柱穴の構築は新地式期から認められ、柱穴に伴う東西の谷の遺物包含層が加曽利B式期から形成されることから、加曽利B式期まで遡る可能性もある。しかし、新地式～大洞B式期までは、大洞BC式期以降と比較すると数は少ない。大洞BC式期以降になると、東の谷周辺を中心に柱穴の構築は活発化する（図171）。大洞C2式期の柱穴が最も多く確認され、大洞A式期になると柱穴数は減少し、大洞A'式期以降は認められない。

土坑Ⅳ類は69基、小土坑は322基確認されている。土坑Ⅳ類・小土坑は、土坑Ⅰ類（柱穴）と分布



域が類似しているものも多く、柱痕跡の確認はできないが、柱穴である可能性も考えられる。

確認した柱穴のうち大型のものを選別し、柱配列・柱間距離を基に4棟の組み合わせを考えている。

SB01 6本柱。平面プランは六角形。大洞C2式期。

SB02 4本柱。平面プランは長方形。大洞BC以降大洞C2式期以前。

SB03 6本柱。平面プランは六角形。大洞C2式期。

SB04 4本柱。平面プランは方形。大洞C2式期。

SB01～04の柱間距離は3.0m～3.5m前後、掘り方の径は70cm～80cm前後が主体である。SB02はSB01に切られており、時期差があることが確認できる。SB01・03・04は、大洞C2式期の所産であるが、重複して検出していることから、同一の場所で建て替えられたことが認められる。また、SB01の主軸方向とSB04のSK91-SK101間の方向が北東-南西で一致し、SB02・03の主軸方向が北西-南東で一致する。軸方向を意識して建物を構築していた可能性も指摘できる。

今回、これら復元した建物を掘立柱建物として報告したが、小迫北・南地区全体で上面が削平されている可能性が高く、本来は竪穴住居であった可能性がある。この課題について、近隣の遺跡と比較し、若干の検討を加えておく。

近隣の後期末～晩期後葉の竪穴住居は、飯館村山辺沢遺跡（玉川1984）・羽白C遺跡（山内ほか1988・鈴鹿ほか1989）、福島市南諏訪原遺跡（武田ほか1991）、郡山市北向遺跡（本間ほか1990）等で確認されている。山辺沢遺跡では主柱穴がなく、円形・楕円形に壁柱穴が巡り、地床炉・石囲炉を持つ構造が確認されている。南諏訪原遺跡では4本主柱の方形プランを呈し、壁柱穴を伴う周溝が円形に巡り、地床炉を持つ構造が確認されている。主柱穴の径は17～65cm、柱間距離は1.4～3.1mを測るが、主柱穴の径が40cmを超えるもの、柱間距離が2.5mを超えるものは少ない。北向遺跡では、4本あるいは5本主柱で方形、多角形プランを呈し、石囲炉を持つ構造が確認されている。主柱穴の径は13～32cm、柱間距離は0.9～2.0mを測る。飯館村羽白C遺跡では、主柱穴数は不明であるが、地床炉を持つ大型のもの・不規則な柱配列で石囲炉を持つ構造が確認されている。

これらと小迫北地区台地部の柱穴群を比較すると、平面プランについては4本主柱、5本主柱の構造を呈するものについては類似性が認められるが、小迫北地区では柱穴の周囲に円形にめぐる壁柱穴・周溝のほか、炉跡も確認できないことが指摘できる。小迫北地区では炉跡等は既に削平されている可能性があるが、近隣遺跡の竪穴住居主柱穴の径は40cm以下であることが多く、70～80cmを測る小迫北地区の大型柱穴とは差が認められる。柱間距離も2.5m以下が多く、3.0m以上を測る小迫北地区SB01～04とは規模の点で明確な差が認められる。

しかし、羽白C遺跡のSI42（東側半分は切られているため主柱穴数は不明）のように主柱穴の径が54～64cm、柱間距離は3.7mを測る大型の竪穴住居も確認されており、小迫北地区SB01～04と規模が共通するものも認められる。

大洞C2式期前後の掘立柱建物は、福島市宮畑遺跡（斉藤ほか2004）・南諏訪原遺跡等から確認されている。宮畑遺跡では、4本柱で平面プランは方形～長方形を呈し、柱間距離2.7～5.4mを測る。南諏訪原遺跡では6本柱で平面プランが六角形、4本柱で平面プランが長方形を呈し、柱間距離2.9～5.7mである。これらは柱数・平面プラン・柱間距離において、小迫北地区のSB01～04と共通する部分が多い。

この比較から、小迫北地区のSB01～04などの大型柱穴群は、掘立柱建物あるいは大型竪穴住居を構成する可能性が高いと推定している。また、小型の柱穴・土坑Ⅳ類・小土坑は、竪穴住居・掘立柱

建物どちらの遺構に伴うかは判断できない。段丘上に立地する南諏訪原遺跡・羽白C遺跡等の遺跡では、竪穴住居と掘立柱建物の両者が確認されており、小迫北・南地区でも竪穴住居と掘立柱建物が並存した可能性も考えられる。

(2) 埋 設 土 器

小迫北地区台地部で、掘り込みを伴って埋設されているものが1基確認されている。出土遺物から晩期中葉と推定される。

(3) 西 の 谷

加曽利B式期から土器・焼獣魚骨等が廃棄され始める。加曽利B～大洞B式期までは、大洞BC式期以降と比較すると遺物量が少なく、廃棄行為は停滞している。大洞BC式期以降になると廃棄行為が活発化し、遺物量は急激に増加し、大洞C2式期まで継続的に行われている。西の谷は、東の谷と比較すると土器の出土量が多く、長期間かけて形成されており、谷の堆積土中を掘り込む遺構が少ない。このことから、西の谷は後期中葉～晩期中葉まで廃棄場として利用されていたと考えられる。

(4) 東 の 谷

斜面上位に加曽利B～新地式期にかけて暗褐色土を基調としたⅢ-3b層（獣骨を含まない）が認められる。Ⅲ-3b層は、谷中央に向かってくぼむような堆積状況ではなく、層位がブロック状に分かれ、掘削及び埋め戻しが重複して行われたような状況を呈している。また、ローム粒や炭化物などの混入が多く、人為的な影響が大きいことも確認できる。この堆積状況から、Ⅲ-3b層は整地または重複した遺構の構築により、形成されたと考えられる。

大洞BC式期には、主に斜面下位のⅢ-3b層上に貝・獣魚骨が廃棄され、混貝土層であるⅢ-1層、獣魚骨を含む土主体層であるⅢ-3a層が堆積する（小迫貝層の形成）。Ⅲ-1層・Ⅲ-3a層の堆積は、大洞C2式期で終了している。この貝層の形成は、Ⅲ-3b層上における遺構の構築時期と一致することから、土坑Ⅰ類（柱穴）を中心とした遺構構築に伴うものと考えられる。

混貝土層であるⅢ-1層は、約12×10mの範囲で確認された。Ⅲ-3a層は、検土杖によるボーリング調査ではⅢ-3b層との区別が難しいため明確な分布範囲は示せないが、76Tでは確認されず、76Tより東側の72T、1・3～6Gで確認される。Ⅲ-3a層は、Ⅲ-1層と互層となって堆積している可能性もあり、Ⅲ-1層と一連のものと考えられる。

72T、1・3Gのコラムサンプルの調査結果では、Ⅲ-1層の最大厚は24cm、Ⅲ-3a層の最大厚は33cmであった。これを台ノ前北（南）貝層及び西向貝層と比較すると、小迫貝層の堆積は極めて薄いことが認められる。

また、各コラムサンプルのⅢ-1層の計測混貝率は、72TS1で24.7%、S2で14.5%、1GS1で2.3%、3GS1で13.9%である。1GS1は、他のコラムサンプルと比較すると極端に低く、Ⅲ-3a層に近いものと言える。小迫貝層の計測混貝率は、概ね台ノ前北貝層等の土主体層（貝層Bタイプ）よりは高いが、西向貝層の綱取式期（64T大別a層）より低いことが指摘できる。

このように、小迫貝層は、台ノ前貝層・西向貝層と比較すると、分布範囲が狭い上、堆積は極めて薄く、混貝率も高いものではないことが認められる。後期中葉～晩期中葉にかけて西の谷など明確な土器等の廃棄場が形成されているにもかかわらず、貝層形成の時期及び場所が限定的であることが指摘されよう。また、土主体層であるⅢ-3a層も薄い堆積をしていることから、台ノ前北貝層等とは異なり大規模な土の廃棄によるものではないと推定される。

(5) 柱 穴 の 性 格

後期末～晩期後葉における柱穴で構成される施設の用途について考えてみたい。

- ①西の谷で、土器（製塩土器を含む）、石皿・磨石等の石器類等の道具、焼獣魚骨の多量の廃棄が確認される。
- ②東の谷でも、土器（製塩土器を含む）等の道具、貝・獣魚骨の多量の廃棄が確認される。
- ③埋設土器群等の明確な祭祀遺構の検出が少なく、土偶等の祭祀遺物も集中して出土するなどの状況が確認されない。

以上の点から、後期中葉～晩期後葉にかけて、小迫地区台地部は居住地であったと推定できる。居住地である以上居住施設が存在するはずだが、今回の調査で確認された建物と考えられる遺構は柱穴だけである。したがって、柱穴が構成する施設は、掘立柱建物・竪穴住居のいずれであっても居住施設の可能性が高く、分布範囲は居住域を示していると推定している（図171）。

(6) 製塩土器について

小迫北地区では、Ⅲ－1層・Ⅲ－2a層・Ⅲ－3a層から多量の製塩土器が出土している。以下に特徴をまとめる。

口縁部

- ・直口気味のものもあるが、緩く内湾するものが多く、厚さは1cm前後である。
- ・内面は丁寧に調整されて光沢がある。
- ・外面は粗い調整のものが多く、輪積み痕をそのまま残すものもある。
- ・表面がピンクかがった赤褐色・橙色を呈するものが多く、剥離しているものも見受けられる。

底 部

- ・径は7～10cm前後、厚さは1～2cm前後に集中する
- ・内面は丁寧に調整されて光沢があるものが多い。
- ・外面はヘラケズリ、ヘラナデのような調整が施される。

今回の調査では、製塩土器が出現する時期を明確にできなかったが、Ⅳ区の包含層の調査では、大洞C2式が多く出土するⅢA・B層から多量の出土が認められることから、大洞C2式期には出現していたと推定される。また、ⅢA・B層と比較すると出土量は劣るものの、大洞C1式を多く含むⅢC層からも一定量に出土しており、製塩土器の出現が大洞C1式期まで遡る可能性も考えられる。

段丘上に製塩土器が多量に出土していることから、小迫北地区低地部に製塩遺構の検出を主目的の一つとして調査区を設定したが（73T）、製塩炉等の遺構は確認できなかった。

また、低地部（73T）において、製塩土器の出現が推定される大洞C2式期の遺物包含層は確認されなかったが、後期中葉～晩期前葉の遺物包含層が確認された。このことから、製塩を行う以前にも低地部を利用していた可能性が考えられる。遺物包含層下の地山の標高は約3.6～4.5mを測り、製塩炉等の検出には、さらに北側にあたる標高がより低い汀線付近の調査が必要と考えられる。

4. 小迫北・南地区、南台地区台地南部の変遷

小迫北・南地区及び南台地区台地南部の変遷を時期別に表7にまとめた。時期的な概略は次の通りである。

I 期 前期初頭～中葉

遺構は確認されていないが、小迫南地区斜面部において遺物包含層（Ⅲ－5層）を確認している。

表7 小迫北・南地区、南台地区台地南部変遷表

時期区分	細別時期	土器型式	主な遺構・土	遺構の形成						貝層・遺物包含層の形成				遺物包含層の形成		
				竪穴住居	土坑Ⅰ類 (柱穴)	土坑Ⅱ類 (貯蔵穴)	埋設土器	土坑Ⅳ類 (その他)	内容	西の谷		東の谷		斜面部	南谷	低地部
Ⅶ	4	大洞A	覆土A類 覆土C類		○			○	遺構数の減少。							
	3	大洞C2	覆土A類 覆土C類		◎			◎	柱穴は前段階同様多い。	◎	Ⅳ区Ⅲ-2a層	土器、焼獣魚骨の廃棄。	◎	Ⅲ-1層 [72T Ⅲ-1層]	Ⅲ-3a層 [5G Ⅲ-3a層]	貝・土器・獣魚骨等の廃棄。
	2	大洞C1	覆土A類 覆土C類		◎		○	◎	柱穴は前段階同様多い。	◎	Ⅳ区Ⅲ-2a層	土器、焼獣魚骨の廃棄。	△	Ⅲ-1層?	Ⅲ-3a層?	貝・土器・獣魚骨等の断続的な廃棄?
	1	大洞B/C	覆土A類 覆土C類		◎			◎	柱穴の増加。	◎	Ⅳ区Ⅲ-2a層 Ⅳ区Ⅲ-2b層	土器、焼獣魚骨の廃棄。	◎	Ⅲ-1層 [3G Ⅲ-1層]	Ⅲ-3a層 [1G Ⅲ-3a層]	貝・土器・獣魚骨等の廃棄開始。
Ⅵ	3	大洞B	覆土A類 覆土C類		○			○	柱穴の構築。	○	Ⅳ区Ⅲ-2b層	土器、焼獣魚骨の廃棄。				○
	2	新地	覆土A類 覆土C類		○			○	柱穴の構築。	○	Ⅳ区Ⅲ-2b層	土器、焼獣魚骨の廃棄。	◎	76TⅢ-3b層	整地or遺構掘削?	○
	1	加曾利B	覆土C類		△			△	柱穴の構築開始?	○	Ⅳ区Ⅲ-2b層	土器、焼獣魚骨の廃棄の開始。	◎	76TⅢ-3b層	整地or遺構掘削?	○
Ⅴ	3	網取													△	
	2	大木10	覆土A類 覆土C類			○			竪穴住居・貯蔵穴の構築。						△	
	1	大木E	覆土A類 覆土C類	○		△			貯蔵穴の構築?						△	
Ⅳ	3	大木Eb													△	
	2	大木Ea													△	
	1	大木Eb	覆土C類			○			南台地区台地南部で貯蔵穴の構築。						△	
Ⅲ	2	大木7a													△	
	1	大木6	覆土A類			○			小迫北地区で貯蔵穴の構築開始。						△	
Ⅱ	1・2	大木3~5													△	
I	2	前期刃頭 ~中葉							・土器散布のみ。						○	△

◎=多く確認している、○=確認している、△=推定のみ
覆土A類 粘性のある締まりのある覆土。褐色・暗褐色を基調とする。
覆土C類 黒色、黒褐色を基調とする覆土。

◎=活発な形成時期、○=形成時期、△=可能性のある時期

Ⅲ-1 混貝土層（暗褐色・黒褐色土。）
Ⅲ-2a 黒褐色土（焼獣魚骨を含む。）
Ⅲ-2b 暗褐色土（焼獣魚骨を含む。）
Ⅲ-3a 暗褐色・黒褐色土（獣魚骨を含む。）
Ⅲ-3b 暗褐色土（獣魚骨を含まない。）

○=形成時期
△=可能性のある時期

また、小迫北・南地区の広範囲でⅠ期の土器の散布が認められる。

Ⅱ期 大木3～5式期

小迫北・南地区及び南台地区台地南部においては遺構・包含層等は確認されていない。

Ⅲ期～Ⅳ期大木6～8b式期

小迫北地区台地・南台地区台地南部で貯蔵穴が構築され、小迫北地区台地部における遺構構築が開始される。

Ⅴ期 大木9～綱取式期

小迫南地区台地東部で、竪穴住居が確認されているほか、小迫北地区台地部及び南台地区台地南部では、前段階に引き続き貯蔵穴が確認されている。

本時期の最終段階である綱取式期の遺構は確認されておらず、遺構の構築は一時収束するが、南谷部で遺物包含層（Ⅲ－5層）が確認されている。

Ⅵ期 加曽利B～大洞B式期

柱穴が構築され始め、再び小迫北・南地区の利用が始まる。西の谷では、土器・焼獣魚骨等の廃棄が開始され（Ⅲ－2b層の堆積）、東の谷では整地あるいは遺構の構築が行われる（Ⅲ－3b層の堆積）。低地部でも遺物包含層（Ⅲ－5層）が形成される。

Ⅶ期 大洞BC～A式期

小迫地区の利用が最も活発になる時期である。引き続き柱穴が構築される。東の谷では、Ⅵ期に堆積したⅢ－3b層を掘り込む柱穴も多く、Ⅵ期と比較すると数は増加する。SB01～04の構築も認められる。西の谷では、引き続き土器・焼獣魚骨等の廃棄が行われる。Ⅵ期と比較する土器・焼獣魚骨の数は急激に増加する。東の谷では、Ⅲ－3b層上に貝層Ⅲ－1層・Ⅲ－3a層が堆積する（小迫貝層の形成）。Ⅵ期に続き低地部では、遺物包含層（Ⅲ－5層）が確認される。大洞A式期になると遺構数は減少し、小迫地区及び浦尻貝塚における遺構構築は収束する。

5. 小迫地区のまとめ

小迫南地区斜面部では、前期前葉の遺物包含層が確認され、浦尻貝塚では確認されていない前期前葉の遺構が検出される可能性が指摘できる。南台地区台地南部及び小迫北・南地区では、前期末～中期末の貯蔵穴が確認されることから、それぞれの時期の竪穴住居が小迫北地区等で存在することも予測される。

中期末には、南台地区の同時期の居住地から約300m南東に離れた地点（小迫南地区台地東部）に、居住地が形成されている。南台地区の居住地とは一連のものとは考え難く、隣接して別の居住地が形成されていたと言える。南台地区では、前段階から続く継続的で集中的な遺構形成が認められるが、小迫北・南地区では断続的であると考えられ、大きな差異が認められる。この2箇所の居住地がどのような関係にあったのか今後の大きな課題になろう。

小迫北地区では綱取式期の遺構が確認されず、台地部における遺構の構築は、大木10式期で一時収束すると推定される。しかし、小迫地区南谷部では後期前葉と推定される遺物包含層が確認されており、遺構を構築している可能性も考えられる。

後期中葉の明確な遺構は小迫北・南地区では確認されていないが、後期中葉～後期末には、東の谷では整地または遺構構築等の掘削行為が行われる。柱穴の検出が少ない時期であり、この掘削行為による掘り込みが竪穴住居等の居住施設である可能性も考えられる。一方、西の谷では、土器・焼獣魚

骨等の廃棄が開始される。

後期末には、柱穴が確実に構築されることが認められ、晩期前葉～中葉にかけて増加する。晩期前葉以後は、東の谷において、前段階の掘削等により形成されたⅢ－3b層を掘り込む多数の遺構が集中して構築される。柱穴等遺構の構築は大洞C2式期が最盛期であり、大洞A式期で縮小し、大洞A'式以降は認められない。このように東西の埋没谷を中心とした居住域が後期末～晩期後葉まで営まれている。

この居住地の形成に伴い、東の谷斜面下位には、貝・獣魚骨が廃棄され、小迫貝層が形成される。西の谷でも、前段階以上に廃棄行為が活発化し、土器・焼獣魚骨等が多量に廃棄される。これら廃棄行為も大洞A式期以降は明確ではなく、居住地の変遷過程と一致した状況が認められる。

このように、小迫地区では、南台地区で遺構の構築が収束する後期中葉以降の活動の痕跡が確認でき、断続期をはさむ可能性はあるが、浦尻貝塚全体を通してみると、ほぼ連続して活動していたことが確認できる。

東の谷では、後期中葉以降、整地または遺構の構築等が行われたと予測され、晩期中葉には近接した場所でSB01～04の建て替えが認められるほどの遺構の集中が認められる。このように東の谷では、継続的で集中的な遺構の構築等の土地利用及び斜面下への貝・獣魚骨の廃棄による小迫貝層の形成が認められる。東の谷は、後期中葉以降の集落の中心部分にあたると考えられよう。

西の谷では、後期中葉～晩期中葉までの長期間にわたる継続的な土器・焼獣魚骨の廃棄行為が行われ、東の谷との利用のされ方が異なることが認められる。

このように小迫北地区を中心とした後期末～晩期後葉の集落は、東の谷を継続的に利用した居住地と貝塚を伴った明確な廃棄場を持つ集落として位置づけられよう。